

私の経営

茨城県鉾田市でトマトを63㍏施設栽培する伊藤農園・F(ドットエフ)は、暑さで収量や品質を落としやすい夏から、翌春にかけて収穫する作型を開発し、年間を通じて地元スーパーを中心に契約出荷する。こうした作型は珍しいが、夏場は夜間にヒートポンプでハウス内を冷やすなど、暑さ対策を徹底。冬場は万全な保温対策とヒートポンプ主体の加温で燃油費を抑える。

開発した作型は、自作し

茨城県鉾田市・施設栽培トマト 伊藤農園.F

周年で出荷 節油策も駆使



夏越し作型の高軒高ハウスで、8月から収穫を始めたトマトの生育を見る伊藤代表(茨城県鉾田市で)

た高軒高ハウス20㍏で5月 太郎」と「桃太郎ホープ」に播種(はしゅ)、6月に10月より翌年7月まで収穫する定植、8月より翌年5月に取る長期取りの作型と合わせ、周年出荷する。8月10

月は全国的にトマトの出荷量が少なく、価格低下のリスク低減が見込める。代表の伊藤健さん(62)は

こだわりポイント

- ☑夏越しの作型開発
取引先に周年で安定供給
- ☑周年でヒートポンプを駆使
夏は冷房で収量と品質を確保。冬は燃油価格の高騰対策に

「全量契約なので、糖度6以上で一年中安定して作る責任がある。暑さ対策の課題が多く、10年もかかったと試行錯誤の歴史を語る。夏場は生理障害や病害虫が発生しやすく、関東の平野部でこうした作型は難しい。暑さ対策として、夏の夜間はヒートポンプの稼働温度を18度に設定。呼吸による栄養の消耗を抑える。冬の保温にも使う内張りカーテンを三重にして保冷効果を高め、側窓カーテンも張る。地下水の気化熱で冷却

した外気をハウス内に取り込む独自システムも開発し、終日稼働させる。病害虫対策には、このシステムやヒートポンプによる湿度管理をはじめ、自家製の木酢や納豆液などを使用。同県はトマトの長期収穫の作型の場合、農薬の使用成分回数を48回とするが、伊藤さんは4分の1以下。化学農薬・肥料の使用量を半減する県の特別栽培農産物の認証も取得し、消費者にPRする。

経営概況

▽労働力
従業員2人とパート9人、家族3人▽経営規模
施設栽培トマト63㍏、10㍏当たり収量約30ト

ヒートポンプは冬場の燃油価格の高騰対策にも役立っている。夏越し作型のハウスで、今シーズンは稼働温度を14度に設定してフル稼働。燃油暖房機の稼働は早朝の1時間ほどで済み、節油効果を実感する。ただ、暖房目的だけでは導入費用に見合わないともみる。全量を値決めができる条件で契約出荷する。秋の長雨による減収や、燃油や肥料などの価格の高騰を受け、昨年9月と今年1月にトマトの価格を5〜10%値上げた。伊藤さんは「値上げしても価格上昇分は賄いきれない」と指摘。燃油のロスを抑えるなどして対応していく。